特集〈緑蔭図書紹介〉

『遊びと日々』

久野　昭著

西頭三雄児

多くの人々特に乳幼児の育ちに関わる人々は、遊びの大切さを強調します。一般的には「遊びは、子どもにとって楽しい活動であり、心身の発達に不可欠な活動である」ととらえています。果たして育ちに関わる遊びは、子どもだけの占有物でしょうか。また単純に楽しい活動に止まるものでしょうか。さらに遊びは直接心身諸機能の発達と結び付くものでしょうか。

これらの疑問は、私だけの疑問でしょうか。この疑問に対して、ひとつの答えを示してくれるのが、『遊びと日々』（南窓社、一九九四年）と思います。本書は、近代合理主義に対するポスト・モダンの流れに沿った存在論的人間学を目指しているエッセイです。

ここで取り上げられる「遊び」は、単に楽しい「娯楽」ではなくて、古代日本人にみられた「遊び」の原形とも言えるものです。「遊び」は日常生活の流れが中断する「はれ」の「間」に現れ、人々に日常性からの離脱を体験させます。その時人は、気持ちの「ゆとり」と同時に「不安」を感じ取ります。幼児期「隠れ鬼」で、鬼になって目をつぶり、「モウ、イイヨ！」の「子」の声で目を開けた瞬間を思い出してください。その時周囲の光景を、全く新しい世界のように感じ取ったのではないでしょうか。「遊び」は、人間を奥深い心の源に引き戻すことによって、自己を意識させると同時に「生き甲斐」をもたらす活動と考えられています。

このような遊びは、子どもでなくておとなの遊びの特質ではないかと受け取られそうです。本書で取り上げられた遊びは、『万葉集』『源氏物語』に登場する「日常性の枠組みに定着していなかった」古代の人々のものでした。現代の子どもたちも、日常生活の労働と習慣といった枠組みから解放されている点から、子どもの遊びは、古代の人々の遊びと本質的に類似しているのではと考えられます。さらに著者は、現在のおとなの娯楽の中にも、古代日本人の遊びの特質がなお息づいていることを記しています。

現在の近代合理主義から「遊び」を研究する動向に対立して、「日常非日常を繋ぐ回路を探りながら人間存在の問題」（二頁）を探る著者の意図に従って、非日常性を表す「遊び」と人間存在との関わりをさらに詳しく紹介したいと思います。

本書は、「ひとともの」、「形と心」そして「遊びと日々」の三部作からなっています。

「ひとともの」の章は、「ひと」、「人」、「もの」、「おに」、「人間」、「心の鬼」、「ひとに潜

むもの」の七つの節からなり、「遊び」がもたらす人間存在の根底に蠢く「こころ」・「おに」・「もの」について書かれています。

そのような「おに」としての「もの」が、人の心の底に潜んでいる。それは普段は心の内奥に隠れていて、窺い知る事もできない。その「もの」が蠢きはじめるのは、どう埋めようもない自分と他者との間隙、「ひと」と「ひと」との間を、客観的な対象として見るよりは、むしろ不安とともに、自らの心の深みに感じ取ることによってではなかったろうか。今日の私たちにはそれを「もの」とよぶ習慣はないが、だからといって、まことに「人間」的な「もの」が「ひと」から失われたわけではない。（八五頁）

この「もの」、「おに」、「こころ」とは、決して客観化されえないため、日常的次元では、快くない、また安心のならない感情をひきおこすと考えられます。人は、遊びのなかで、この人間の内奥にふれる時、本来的には、楽しみというより、怖さとか不安を感じ取るのではないでしょうか。

「形と心」の章では、この「こころ」に迫る通路・回路として形が取りあげられます。そして心と形との乖離とその均衡が書かれています。この章は、「こころ」、「心情」、「うら」、「うらみ」、「占」、「眼」、「形見」、「象」、「花」、「象徴」、「開花」、「腹心」、「手」の一三節からなっています。

私はここで、形と心の関連を「うら」からでてくるような形と心との関連を、問題にしてきた。その「うら」とは、たとえば表面を

引っ繰り返すとすぐ現れるような裏面ではない。引っ繰り返したときには、もう裏は表になっている。そういう裏ではなく、物を対象としてしか見ない眼には見えない、視線の届かない内奥、奥底という意味合いでの「うら」であり、日本人は、その意味で心も「うら」とよんだのであった。（一四九頁）

「遊びと日々」の章は、「春」、「大野の原」、「野遊び」、「ひひな」、「雛遊び」、「うつつ」、「うつせみ」、「空蟬」、「無常」、「異常」、「生き甲斐」、「遊びと日々」の一二節にわかれています。前章の「こころ」に迫る具体的・現実回路として、遊びが取り上げられます。

日頃は思いも寄らぬ怨念の存在に、人は愕然とし、普段はその蠢きすら気取られずに現身の「ひと」の心の底の暗部に潜んでいる「もの」に、いまは脅えながら、人と人、自己と他者との埋めるべくもない冷たい隙間に気付く。ただしそれを客観としてみるのでなく、むしろ自らの心の深みに感じとることで、ここでもまた、人間は自己を捉えなおすことができた。（二二九頁）

このように「遊び」は、直接に心身諸機能と関わるのではなく、自己といった個々の人間の「生き甲斐」体験を通して、それらの発達に関わっています。

（名古屋柳城短期大学）